

『授業内での高校生の質問行動を引き出す方法の検討』

政策・メディア研究科 修士課程 2 年 竹尾 俊邦

1. 研究概要

本研究は、授業内での高校生の質問行動を引き出す方法を現場での実践を通じて検討するものである。高等学校における学校授業の実状として、教師の問いかけに対する生徒の無反応や授業中に質問できない生徒の存在など、教師と生徒のコミュニケーションは十分に機能しているとはいえない。そこで本研究では、教師に対して半構造化インタビューを、生徒に対して質問紙調査を実施し、授業内の両者のコミュニケーションを阻害する要因を特定する。その後、研究協力校(筆者の母校)と共同で、この阻害要因を取り除く授業運営の方法を実践を通じて検討する。

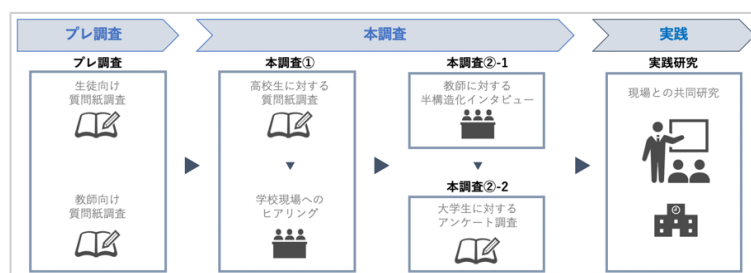
2. 研究の目的

本研究では、高等学校の学校授業における現状の問題点と課題意識に基づき、主体的・対話的で深い学び(「アクティブ・ラーニング」)の視点からの授業をいかにして成立させるか、「生徒と教師のコミュニケーション」とりわけ「生徒の質問行動」という観点から、そのメカニズムや方法論を探っていく。

本研究の目的は、最終的に「高等学校の教師はどのようなことを意識した上でいかなる方法を用いれば、授業の必要な場面で生徒の質問を引き出せるようになるのか」という点について、ポイントとなる事項や具体的な方法を体系的にまとめることにある。そのために、高等学校における「授業中の生徒の質問行動」に関する現状確認を行い、生徒からの質問が生じにくくなっている背景の要因を探る。

3. 研究の構成

本研究の全体像は以下のとおりである。プレ調査において示唆された内容を中心に本調査で検証を行い、本調査で明らかになった現状の課題について実践を通じて検討するという手順である。



また、本研究で設定したリサーチクエスチョンは下記4つである。

RQ1：授業中の生徒の質問行動は、教師・生徒・クラスにとってどのような意義があるか。

RQ2：授業中の生徒の質問行動の現状はどうなっているか。

RQ3：授業中に質問が思い浮かんでいて、クラス全体に共有する意義があるにも関わらず、生徒が質問行動を躊躇する要因はどのようなものがあるか。

RQ4：授業中の生徒の質問行動を引き出すため、教師が意識すべき項目や具体的な方法にはどのようなものがあるか。

なお、本研究における研究の対象は以下のように設定した。

<p>〈 研究の対象 〉</p> <p>学習に対する意欲が高い生徒・教える意欲の高い教師によって構成される 学力レベルが中上位の高等学校 及び その学校の「学級」・生徒・教師</p>

4. 各調査の概要

プレ調査

	生徒向け質問紙調査	教師向け質問紙調査
調査対象	大分東明高等学校 特進コース 1,2年生：328名	大分東明高等学校 特進コース 教師：15名
選定理由	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 研究の対象となる高校の条件を満たす ✓ 生徒の学力レベルが中上位（偏差値65） ✓ 生徒の多様性：性別、文理、中高一貫&外部進学 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 研究の対象となる高校の条件を満たす ✓ 授業に対する熱量が大きく教える意欲が高い ✓ 母校なので接触が容易である（コロナの影響）
選定の妥当性	学年、男女、文理選択に偏りがなく、十分なサンプル数の回答（回答率100%）	定性調査のサンプルサイズとして妥当（※ニールセン博士の実験）
調査項目	授業内外の質問行動、質問に対する意識 など	生徒の質問行動に対する考えや意識 など
調査手法	定量調査(5件法) + 定性調査(自由記述)	定性調査(自由記述)が中心
分析方法	定量分析：単純集計・クロス集計・相関分析 定性分析：テキストマイニング（KH Coder）	定性分析：生データの解釈、コード化
実施時期	2021年2月	2021年2月
実施方法	紙媒体での回答	紙媒体での回答

本調査①

	高校生に対する質問紙調査	学校現場へのヒアリング 補足調査
調査対象	都立高等学校7校 高校生(1年生～3年生)：2,495名	都立高等学校7校 教員および管理職：複数名/校
選定理由	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 東京都教育委員会の主導で選定 ✓ 学力レベルが中上位の高校へ優先的に打診 ✓ 調査協力に応じてくださった高校が対象 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 調査に協力してくださった7校が対象 ✓ 参加者と参加人数は学校側が決定
選定の妥当性	研究の対象から外れる(偏差値50を下回る)学校が3校含まれるものの、多様な属性かつ十分なサンプル数の回答が得られた	回答を行った生徒に関わる教員(クラス担任や教科担当)または学校全体を把握する管理職(校長や教頭)の参加 → 詳細な状況説明が可能
調査項目	授業中の質問行動、非認知能力（主体性など）	(質問紙調査の回答結果を解釈)
調査方法	定量調査(5件法)	定性調査(ヒアリング)
分析方法	定量分析：単純集計・クロス集計・非認知能力との相関分析・偏差値による学校間比較	—
実施時期	2021年9月～10月	2021年12月
実施方法	Microsoft Formsでの回答	オンライン会議（Microsoft Teams）

本調査②

	教師に対する半構造化インタビュー	大学生に対するアンケート調査
調査対象	大分東明高校, 都立高等学校, 岐阜県立高等学校 教師：15名 (7名, 6名, 2名)	慶應義塾大学, 慶應義塾大学院 大学(院)生：10名
選定理由	✓ 研究の対象である教える意欲の高い教師 ✓ コンタクト可能な範囲で偏りのないよう選定	✓ 高校時代を客観的に振り返ることができる ✓ 在籍していた高校の学力レベルが中上位である 可能性が高い(研究の対象)：大学生⇒慶應生
選定の妥当性	私立と公立, 地域性, 教員歴, 担当教科に偏りなく 十分なサンプル数のインタビューを実施できた	属性において過度な偏りなく、研究の対象(生徒) の代理とみなせる慶應生からの回答を得られた
調査項目	目指す授業・授業空間や授業設計・授業中の質問 生徒の質問を引き出す方法について	授業中に質問をした際の経験、しなかった/ 出来なかった場面との違い、違いを生む要因、 授業中に質問が出ることの意識について
分析方法	定性分析：KI法 (付箋・模造紙)	定性分析：生データの解釈、コード化、分類法 テキストマイニング (KH Coder)
実施時期	2021年11月～2022年1月	2021年12月～2022年1月
実施方法	対面 または オンライン会議 質問リストを資料として用いる	Googleドキュメントへの入力

実践研究

授業	数学の問題演習：教材として進研模試(高1)の過去問を使用
対象	大分東明高等学校 特進コース1G13：生徒40名
選定理由	✓ 新型コロナの感染状況による影響を最小限に抑えて実践研究に臨むことができる ✓ 大分東明高等学校および該当クラスが「研究の対象」に合致している
筆者の立ち位置	✓ 教師G：筆者が在籍していた(2016年卒業)際の数学担当・授業アシスタント ✓ 生徒：高校の卒業生・慶應義塾大学院に所属する研究者・授業アシスタント
検証内容	① ICT機器を活用することの効果：「MetaMojji Classroom」による回答共有 ② 対面参加によるアシスタントの効果 ③ オンライン参加によるアシスタントの効果：Zoomを使用
検証方法	授業後のアンケート (Googleフォーム) + 教師Gとの振り返り
実践研究スケジュール	12月21日(火) 授業実践の事前打ち合わせを実施 (オンラインにて30分) 12月22日(水) 実践研究として、1回目の授業を実施【授業1】 12月23日(木) 実践研究として、2回目の授業を実施【授業2】 12月24日(金) 実践研究として、3回目の授業を実施【授業3】 12月26日(日) 授業実践の振り返りミーティングを実施 (オンラインにて1時間)

5. 研究成果

本研究で得られた知見は次のとおりである。

- ① 授業中の質問は、質問者自身のみならず、他の生徒や授業を行う教師にとっても意義がある。
- ② 多くの生徒が授業中の質問を躊躇しているものの、他の生徒の質問は有意義だと感じている。
- ③ 質問を躊躇する要因は複数あるが、なかでも「授業時間・授業進行」の要因が重要である。
- ④ 生徒の質問を引き出す具体的な方法は、机間巡視・ICT機器の活用・生徒間コミュニケーションの促進などである。
- ⑤ 生徒の質問を引き出す上で重要なのは個別対応と集団指導の使い分けであるが、これについては教師側の「生徒対応の限界」が存在する。
- ⑥ この「生徒対応の限界」に対する対応策の一例として、「授業アシスタント」の導入が、学びの環境の充実からも有効であることが示された。

6. 謝辞

この度は、2021年度 森泰吉郎記念研究振興基金に採択いただきまして、誠にありがとうございました。対面インタビュー並びに実践研究における機材の購入、交通費等に活用させていただきました。ご支援のおかげで、目標としていた研究を実施することができ、また納得のいく研究成果を得ることができました。この場をお借りして感謝申し上げます。